

江田神社の歴史

江田神社は、宮崎県で最も古い霊場の1つで、9世紀にまで遡る記録が残っています。奈良時代（710～794年）から11世紀にかけて、江田集落は日向国（現在の宮崎県）にあった16の宿駅のうちの1つを運営していました。これらの駅は、首都（初めは奈良、次に京都）と地方をつなぐ公道に沿って一定の間隔で設置された政府の施設でした。駅には教育を受けた役人が常駐し、行政の拠点として、また知的交流の拠点として機能していました。江田神社は、もともとは江田駅の敷地内に建てられたと考えられています。日本神話で重要な役割を持つイザナギとイザナミという神道の創造神を祀っているのは、これが理由かもしれません。奈良時代の役人は、この時期に初めて文書化された、日本の建国神話を記した公認の歴史書(日本書紀)を学ぶことを義務付けられていましたが、江田駅の役人が地域の神社の神格選定に影響を与えていたのかもしれません。江田の宿駅の重要性は、12世紀に入り、中央集権国家の影響力が低下していく中で衰退していきますが、江田神社は地域の人々によって維持されていました。江田神社は1662年の地震で大きな被害を受け、元の場所から移築されています。この神社が再び注目されるようになったのは、1868年の明治維新後のことです。明治天皇の新政府（1852～1912年）は、神道を国教として制度化し、江田神社のように土着神話にゆかりのある場所の参拝と整備を奨励しました。